

パネルディスカッション

地域で稼ぐ

～地方創生・グローバル化と起業・人材育成の未来～



パネリスト（登壇順）

仲田 洋子 氏（カッシーニ 株式会社 代表取締役兼 CEO）

岡本 栄 氏（伊賀市長）

伊東 将志 氏（株式会社熊野古道おわせ 支配人）

市野 聖治 氏（鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部学長）

ファシリテータ

渡邊 聡 氏（鈴鹿大学講師）

渡邊聡・鈴鹿大学講師（ファシリテータ、以下、渡邊）



お三方の講演は、大都市部にはないものを使って、地方でいかにやっていくかということがテーマになっていると思います。

仲田さんは、若い世代の旗手として、挑戦的な取り組みを行っていらっしゃいます。岡本さんは、首長の立場から自治体を盛り上げていくことを進めていらっしゃいます。伊東さんは、逆境の中から起業し、その中で若者や人材を育てていく、といった様々な取り組みをされています。

ないものねだりで他所からもってくるのではなく、あるもので、しかも人口減少、超高齢化の進む中で、地域をどのように新しくつくっていくかというのは、極めて大きな課題だと思います。大学としても、今後 18 歳人口が減少していく中で、どのような大学をめざし、どのような役割を担っていかなければならないかが課題であり、とりわけひとづくりに期待されています。

パネルディスカッションを進めるにあたって、まず市野学長からお三方の講演に対する感想・質問などをお願いします。

市野聖治・鈴鹿大学学長（パネリスト、以下、市野）

これから本学が、この地域において新しい価値を生み出していくために、学生とともにどのように学んでいけばよいか考えながら、三人の先生方の講演を伺いました。それぞれに大きな課題があり、その課題に対して従来とは違った切り口で新たな展開をしていらっしゃる、あるいは今まで大変な状況であったところをプラスに生かす発想へと転換されていらっしゃることに感銘を受けました。



仲田さんは、沖縄の中・高生を元気にしていこうという思いが新しいアイデアを生み、自身にとっても面白くなっていて、大きく発展されておられるのだと思います。講演前に仲田さんとお話をしたときに、「ノーベル賞を受けるひとは、みな 15 歳、16 歳の頃にひらめいたことがスタートになっている」とおっしゃっていたのが、印象的でした。私たちが若いひとたちと接する時には、彼らが純粋に考えているアイデアを育てていくことが大切だと思いました。後ほど、仲田さんを育てた Ryukyufrogs のことを伺えればと思っています。“We know the big ocean.” というフレーズが頭に残っています。そうした表現にも、大切なことが隠されていると感じました。

岡本市長は、伊賀の資源をどう活用するのかという中で、様々なアイデアを生み出し、市民・民間が行政の限界を乗り越えられるよう支援をされています。むしろ情報の発信の仕方が重要なのだということをおっしゃっていたのが、印象に残りました。今後の更なる発展のために考えておられることがあれば、お聞かせいただ

きたいと思います。

伊東さんのお話では、若いひとを受け入れる側の経営者の成長こそが、人材育成の課題だという点に感銘を受けました。特に、これからの人材を育てようとしている大学にとっては、教師側の本気度が問われているのだと思いました。長期実践型のインターンシップにも、ヒントがあると思いました。苦勞をされたと思いますが、こうすればもっと良かったと考えていらっしやることがあれば、教えていただければと思います。

お三方には、今から大学に入るとしたら、大学でどんなことを学びたいと考えていらっしやるのかについても、具体的にお話しいただければと思います。

仲田洋子・カッシーニ(株)代表取締役兼 CEO (パネリスト、以下、仲田)



Ryukyufrogs というのは、琉球の蛙という意味ですが、「井の中の蛙、大海を知らず」という言葉からきています。沖縄の小さい島の子は世界のことを何も知らない、だから世界を知ることができるプログラムをつくってあげようということで生まれました。県内の民間企業 40 社ほどがお金を出しあって、沖縄の中・高生を育てるプログラムを実施しています。

そのプログラムが一番の強みは、Ryukyufrogs というブランドです。IT 系の人脈がつながっていて、日本だけでなくシリコンバレーなどでも「Ryukyufrogs で来たのですが、1分でも1秒でもいいので合わせてほしい」と起業家さんたちに伝えると、結構な割合で会ってくださいます。Ryukyufrogs のブランド力のおかげで、いろいろなひとに会えることが強みとなり、それによって、いろいろなひとが成長してきたと思います。

私自身にとって一番よかったことは、日常生活とのギャップを感じられたことです。Ryukyufrogs で会えるのは、大企業の幹部の方や、物理的距離のあるシリコンバレーの方など、本来ならば遠い存在の方です。いろいろなひとに会える非日常的な体験により、新鮮な感覚を味わうことができました。

起業の動機も、Ryukyufrogs とつながっています。非日常的な体験があるからこそ、十数年過ごしてきた日常生活を、ちょっと違う立場から見ることができるようになりました。違う位置から見ることで、身の周りの課題を発見することができると思います。

岡本栄・伊賀市長 (パネリスト、以下、岡本)

いろいろな資源があるのに、それをうまく活かしていなかったのが、これまでだったと思います。

私が高校生の時は、伊賀から山の向こうへ出て行きたいとばかり



思っていました。東京へ行ってよくよく考えたら、故郷にはよいものがいっぱいあることに気がつきました。今、私がここにいるのは、そうしたことの表れだと思います。

ミラノに行ったことで外国の方に伊賀を知ってもらった成果があった訳ですが、伊賀のひとたちにも、自分たちの先人が残してくれたものは世界に十分通用する宝物だったのだと実感してもらえたのが、よかったと思います。

これからは、市民一人ひとりが自分の課題として考えていくことが大事だと思います。その前に自立した市民社会をつくるのが最も重要です。当たり前のことですが、これからの社会を考えるに、「自分のことは自分でやる」、そのような社会でなければやっていけません。そのためには、経済基盤をしっかりとる、観光に力を入れることなどが重要です。

今年（平成 28 年 6 月施行予定）からは、高校生が投票できるようになる訳ですから、自分たちの未来を拓くひとを選んでほしい、自分たちの権利をしっかりと行使してほしいと、若いひとたちには伝えていきます。主権者教育です。自立した市民をつかっていくことこそが、将来にわたって重要なことだと思っています。

市長は、会社の社長・経営者と同じです。しかし、役所では何かを始めようとする「こういう理由で、できません」との答えが返ってくるのがよくあります。何かをしたいと思った時には、「どうすればできるか」が大事だということを中心に据えるようにしておかなければなりません。健全な市民社会、主権者意識をつくって、将来の状況に耐えられる地域社会をつくっていく努力が不可欠だと思っています。

伊東将志・(株)熊野古道おわせ支配人（パネリスト、以下、伊東）



経営者の成長ということで、私自身の経営者マインドがいつ生まれたかについてお話しします。本来は 18 歳で高校を卒業して商工会議所に入る時にそうしたものをもっていなければならないのですが、そうではありませんでした。外に出る機会をいただいて、苦勞をすることができるチャンスをいただけた時に、生まれたのかもしれませんが、「それって何のためにやっているんだっけ」と自らに問う必要があったのですが、その時に生まれたのかなと思います。通帳の残高を見た時には、強烈にやばいなと思いました。

スタッフも含めた人材育成では、大きな企業だけがすばらしいではありません。一人ひとりが達成すべき役割を果たせるならば、経営者が一人でも良いビジネス、よい経営ができると思っています。売上げの大小ではなく、自分が何を成し遂げたいかが大事だという話をみんなにしています。



(渡邊)

ここで、会場の方からの質問・コメントを紹介しつつ、パネリストと会場のみなさまと一緒に議論を進めたいと思います。

(尾鷲市 A さん：会場から)

地域おこし協力隊で、この三月から尾鷲市梶賀町という地域に入らせていただくことになっています。

行政の取り組みや地域おこしをする際に、「事業」と「地域活動」どちらにするのか、しっかり考えて行わないと中途半端なものになると思うのですが、その観点から伊東さんが意識されていることを教えてください。また、岡本さんは行政の立場から「地域づくり」における官民のバランスについてどう考えられているか教えてください。

私は津市出身なのですが、自分が中・高生の時にロールモデルを知っていたら、将来の職業を幅広く考えていたと思います。仲田さんの事業の収益源はどうなっているのか教えてください。



(仲田)

収益源ですが、ウェブ事業なので当初は広告収入を考えていたのですが、広告で画

面が汚くなってしまうのもどうかと思いましたが、中・高生からお金を取ることも考えたくありませんでした。最初に説明したように、中・高生で何かしたいひとにコンサルティングをする事業も行っているのです、そこで会社としての利益を得ることにしました。沖縄の中・高生の選択肢を広げたいという夢をもって会社を始めたのですが、夢だけではやっていけませんし、現実もちゃんと見なければならぬので、コンサルティングで利益を生むように進めています。

(岡本)

「官民協働」などという、民の方にやらされ感が出てきたりします。民の側が「楽しい」「やりたい」と思えなければいけないと思っていますし、地元が好きで、誇りをもっていることが大事だと思います。私自身も伊賀を離れた18歳のときに伊賀はすごいと思えたことが、今日につながっている訳ですから。子どもたちが、これから生きるスタンダードになるという意味で、いろいろな機会を通じて、ふるさとをよく知り、ふるさとに誇りをもってもらうことが大事だと思います。それが、官民一体の基本だと思います。

ふるさとの魅力に気づくことが重要です。伊賀上野城の高い石垣を小さい頃から見てきましたが、他の地域に行ってもこのような石垣はないのです。そういったことがたくさんあります。世の中を知って、気づきがあると、積み重なって誇りにつながると思います。

(伊東)

「ビジネス（事業）」と「コミュニティ（地域活動）」のバランスですが、身の丈にあったものにしていかないといけないと思っています。Aさんに入っていただく梶賀町という集落には、小魚を桜の木のチップで燻製にした「アプリ」という特産品があります。あまり知られていませんが、すごくおいしいですよ。たとえば、それを大量



に売るための会社をつくってコンビニで売ろうとすると、対応できずに外国産のものを使うことになると思います。それは、まちのひとにとって幸せなのでしょうか。何のためにビジネスをするのか、徹底的にヒアリングをするようにしています。そのひとたちが描く理想的な未来を実現することを考えます。そうでなければ続きません。一方、田舎のコミュニティでやろうとする時は、志というよりも、「誰かがやるなら手伝うよ」くらいの気持ちでやっているのです、重荷になってくることがあります。そ

れでは、続かなかったりします。特産品や流通にアプローチする案件に関しては、ビジネススペースに乗せていく方がよいと思いますので、会社でいうところの理念をはっきりさせます。

(鈴鹿市Bさん：会場から)

仲田さんの話から、親近感の湧く身近なところでのつながりが大きく広がるとおっしゃったことに、感銘を受けました。ひとは自分の関心のないところでは動かないので、身近なつながりの輪が重要だと思います。現在の日本社会の人口減少といった問題を、若い仲田さんはどのようにとらえていらっしゃるのでしょうか。

岡本市長は、「自分のことは自分で決める、地域のことは自分たちです」といった志が重要だとおっしゃいましたが、そのとおりだと思いました。質問ですが、数年前まで伊賀地域の観光業は衰退しつ

つある状況だったと聞いていましたが、インバウンド向けの広報戦略での効果はいかがでしょうか。

伊東さんは、若いひとは本気度のある大人のもとに集まってくるとおっしゃっていましたが、それも「親近感」なのだと思います。質問ですが、若者をひきつける「師匠」としての大人を、地域でどう見つけて



いけばいいのでしょうか。

(仲田)

ROLEMODEL の特徴的な事例をお話します。中・高生の通う塾ですが、沖縄は個人経営が多く、規模が小さいです。世界で活躍されている方が沖縄に帰省されている時に、その塾の場所を借りて、中・高生とディスカッションをしました。親近感を感じられる事例です。

人口減少と地域活性化についてですが、沖縄は移住者が多く、移住者で人口が増えています。移住したひとと土のコミュニティができて、そのひとたちで事業を立ち上げていることが多いです。一緒にカフェをつくるなど、コミュニティづくりがサイクルとして



できているので、移住がしやすく、人口が増えやすい環境になっていると思います。

(岡本)

目に見える成果として、近年、欧米系の方に観光で来ていただけるようになってきました。それと、自分たちのまちに誇りをもてるようになったことも効果が大いと思っています。また、インバウンド観光における外国メディアの情報発信力は重要なので、依頼があったときには、忍者コスチュームを着て出迎えたり、出演したりするようにしています。

(伊東)

社会に出た学生は、今悩んでいます。師匠選びですが、みんなが知っている大きな会社がよいかというと、そうでもありません。そのようなところは社長さんに全く会うことができず、窓口になった総務課長さんがアタフタしているということがよくあります。受け入れ候補先には「給料は要らないので、お金では買えないいろいろな経験をしたがっている学生を4か月間雇って成長させてほしい」とお願いします。この話を面白いと言ってくれるひとは、師匠の要素をもっています。そういうことを経営者に問い続けていくことが、師匠の発掘に有効ではないかと思っています。

(行政職員Cさん：会場から)

仕事で県内の中小企業をよく回っています。中小企業が2、3年前から最も困っているのは人手不足です。こうしたシンポジウムでは、必ずと言ってよいほど、「田舎は働く場がない」、「働くところをつくらなければいけない」という話になります。しかし私には、「働くところはあるのだけれど、ひとが来



なくて困っている」と見えます。それをどうするかなのですが、答えが見つからず、今日も答え探しのために参加しました。質問ですが、このような、求人を出さず地域の雇用現場と若いひとなどの求職側のミスマッチをどう解決していけばいいのかということについて、パネリストの方々のお考えをお聞かせください。

(伊東)

長期実践型インターンシップは、行政に紹介していただきました。僕もCさんと同意見で、地方では働くところはいっぱいあります。一定規模以上の工場では、とにかく人手が不足しています。一次産業も人手がありません。自分たちがそうだと認識し

ているにもかかわらず、やり方を変えていません。一方で、工場や一次産業の現場では、職種に対する世間の印象を変えようとはしていません。いい産業であるにもかかわらず、見せ方の工夫ができていないところに問題があると思います。仕事の魅力をどのように伝えるかということに時間を割かないと、雇用の確保にはつながっていかないと思います。協力隊のような年収が半分のところにひとが来るのは、見せ方を変えているからです。

ハローワークでは、求人票の左側に給料が書いてあって、会社名があって、職種があって、最後に会社の理念などが書いてあります。これでは魅力が伝わりません。見せ方を変えなければならないことがわかっているのに、そこに時間をかけていないところに問題があります。今では新しい求人媒体がたくさん出てきています。「DRIVE REGIONS (ドライブ・リージョンズ)」、「日本仕事百貨」、「WANTEDLY (ウォンテッドリー) 」といったいろいろなサイトがあります。そうしたところは、鋭い求人をやろうとしています。たとえば、同じ煉瓦職人であっても、異なる形で表現しています。

(渡邊)

雇用の現場におけるミスマッチに関して、人材を社会に供給する役割をもつ高等教育機関の役割も大きいと思います。この点について市野学長いかがでしょうか。

(市野)

最近の若いひとたちの多くは、自信を失っています。自由で平和な世の中で、逆に何をすればよいのかがわからないといった閉塞感の中にいます。手を差し伸べなければなりません、そのことで彼らの主体性や学ぶ姿勢を損ねてもいけないと思っています。この問題に、真剣に向き合っていかなければなりません。

今までなかった新たな価値を生み出し、つくり出していく。そのことが楽しい誇りに思えることが重要です。

ひとはそれぞれ違った人間観をもっています。ひとつは「人間はサボるもの」、もうひとつは「人間は自らを高めようとするもの」。大学は学生を「自分のすべきことを見つけて、社会に貢献していこうとする力を発揮していく存在である」と信じて、進まなければならないと考えています。

この考えには三つの観点があります。第一に、人間は自分のことは自分でやる自立的な存在だということ。第二に、学びたい、よりよくなりたいと考えていく力がある



ということ。第三に、自分と異なる意見のひととの相互作用で新しいものをつくり出していく力があるということ。この三つの力を高めていくことを考えていかなければならないと思っています。

イノベーションや起業に成功しているのは、ひらめきの強いひとではなく、地道な
ことの中でチャンスをつかんだひとだと、イノベーション分野の著名な学者であるク
レイトン・クリステンセン（ハーバード・ビジネススクール教授）などは言っていま
す。

（学生Dさん：会場から）

仲田さんへ、高校へ行きながら仕事をするのは大変だと思うのですが、どのように
両立しているのですか。また、いろんなところで爪跡を残したいとおっしゃっていま
したが、もし爪跡を残せなかったらどうしますか。

（仲田）

高校生と社長の二重生活になっています。朝9時から夕方5時までは学校に行き、
その後いろいろな方とのアポイントが入っているとといった感じです。

高校の定期テストなどは、時とともに決まってやって来ます。だからと言ってアポ
イントをキャンセルする訳にもいかないもので、空いている時間や、移動時間中に単語
帳を見たりしています。時には、本腰を入れて勉強をしたいと思うこともありますが、
自分が社長になった以上はしかたがないと思っています。

爪跡を残せなかったらどうするかのご質問ですが、爪跡を残すというのは、いろ
んなひとに覚えてもらうことを大事にするということです。覚えてもらえなかった時
は、それでよいと思っています。いろいろなところに種を蒔いておくという行為なの
で、その時成果が見えな
かったとしても、後にあ
の時会ったひとという
ことになったりします。
爪跡を残せなくて、ちょ
っとショックを受ける
こともあります。その
時は次に進もうと思っ
てやっています。



（本学教員Eさん：会場から）

伊賀市は全国三例目となるLGBT要綱を制定したように、「共生社会」ということを

強く意識したまちづくりをなされているように思います。インバウンド観光を推進していくこととの関連でどのように考えられていますか。

(岡本)

伊賀市の LGBT 要綱(伊賀市パートナーシップの宣言の取扱いに関する要綱)では、申請があった同性カップルを「パートナー」と認め、この4月から証明書を発行することにしました。条例ではなく要綱で定めています。

昨年、市内であるアンケートを実施しましたが、性別欄を「男・女・その他」という区分にしました。ある民間統計によると、LGBTの方は全人口の約7.6%で、左利きの方とほぼ同率くらい、見えにくいだけで結構いらっしゃいます。伊賀市には外国籍の方が4,000~5,000人在住しており、市としても多文化共生を進めてきましたが、伊賀市の人口90,000人×7.6%とすると、LGBTの方は6,000~7,000人いらっしゃることになります。社会的不利益や差別を受けないようにしなければならないということで、この施策を進めました。多様性や個性が認められることは、大変重要なことだと考えています。多様性のある社会をつくっていくことは、みんなが生きやすい社会になるということです。



冒頭に市野学長が大学にどのようなことを求めるかとおっしゃいましたが、どのレベルの学習においても、個性が尊重され、個性を発揮できることが大事だと思っています。チャレンジする精神をしっかりと保障して、背中を押してあげないといけないと思っています。外の世界を見てくることが大事だと思っています。

もうひとつは、自分で問題を発見し解決する能力です。いま何が課題で、何をすればよいかを判断する能力が必要だと思っています。私は子どもの頃にピアノを習いたくて、先生のところに行きました。楽曲を即練習するような実践的なものを期待していました。しかし、バイエル赤本から始まり、子ども心に、こんな面白くないものをやらされるのかと思いました。学生が興味あることに、挑戦できることが大事だと思っています。

(NPOのFさん：会場から)

伊東さんへの質問です。地域づくりにおいて、若者はもちろんですが、高齢者の活用も重要かと思いますが、どのように考えられていますか。また、夢古道おわせが赤字から黒字に転換する頃、コンテンツとして温泉をもってこられました。しかし、温

泉が加わる前の段階で、黒字に転換するほかの要因があったのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

(伊東)

お母ちゃんのランチバイキングは、60歳以上の方が役割を果たしてくれました。その方々は、もともと集落で活躍されている方でした。週替わりで三つのグループが1週間ずつ担当しています。1週間やって2週間休みになります。休みの2週間何をやっているかという、まちの活動をしています。ランチバイキングに参加することと並行して、まちの活動が増えているということになります。高齢者の方たちに活躍していただくことが求められている時代です。一方でそのひとたちと同世代のひとたちが支持してくれるサービスそのものが、我々のモデルになっています。高齢者の方々には、郷土愛が残っています。私が若かった頃に、そのひとたちから尾鷲はいいところだよ、とずっと言ってもらって育ったのが未だに心に残っていて、次世代にとって何よりの財産だと思っています。



(渡邊)

終了時刻が迫ってきましたので、パネリストお一人ずつ、本日のシンポジウムで考えられたこと、また冒頭市野学長から質問のあった、大学に対してどのようなことを望むかということについて、お聞かせください。

(仲田)

岡本さんは、ミラノに出展されて世界に目が向いたとのこと。伊東さんは数百人の小さいまちで事業を実施されているということで、対照的なのですが、つながっている部

分もあると思いました。小さいところにフォーカスしながら大きな世界を見るという考え方は、私の ROLEMODEL okinawa にも通じますし、活かしていけるところがあると感じました。

大学教育のあり方ですが、私は今進路を考えている真っ最中で、どこの大学に行こうか、迷っています。日本の大学は先に学部を決めてから入学しますが、海外ではリベラルアーツ（教養学科）のように、まずいろいろなことを満遍なく学んでから、自分のやりたいことを専門的に学ぶというシステムがあります。こうしたシステムが大事なのではないか、と思い始めています。満遍なく学ぶことによって、新たな気づきがあるかもしれないし、興味が広がると思います。広い門から入って、専門的なことを学ぶ方がいいのかな、と思ったりしているので、満遍なく学べる大学が日本にもあったらよいと思います。農業と工学といった遠い分野がつながったりすると、新しいものが生まれやすくなると思います。

（岡本）

お二人の話を伺って、それぞれジャンルは違いますが、結局は同じだなあと感じています。官民協働と言われますが、官民に壁はありません。地域のマネジングや調整をする行政を、うまく使えばいい訳です。

当市の職員には、クレームカードを持たせています。市の職員である前に、市民の一人として考えると解決しやすいのではないかと感じています。市民には、市役所はあなたの方のための組織なので、うんと活用してほしい、と伝えています。ただ、お金は湧いてくるものはないので、骨太の経済基盤づくりは、みんなでしなければならないと言っています。

大学教育についてですが、学生さんたちには、感性の鋭い早めの時期に地域社会に出て来てほしいです。そこで、地域とは何か、コミュニティとはどのようなものか、体感してほしいと思います。そして、また学問の世界に戻っていただくというのが、よいと思います。

（伊東）

仲田さんはすごいなあと思いながら、お話を聴きました。世界を見つつ、自分の生まれ故郷をしっかりともっていて、自分が何者であるかを理解している。早い時期にそうしたことに出会えたことはすばらしいと思います。また岡本市長の話からは、ビジネスの世界に必要なのはパブリックな部分であり、社会的な課題を解決するようなものでないと、世の中に支持されなくなるということ。民のところで公的な部分が必要になってきているということ。他方、公的な機関は民間の手法のようなものが求められて、それぞれが役割を果たしていくことが大事だということ。これらを学ばせていただきました。

僕は大学に行っていないので、ただただ大学のキャンパスにいたい、サークル活動

をしたい、などと思います。個人的には、いろいろな言語を学んでみたいし、心理学のような教育を受けてみたいと思ったりしています。

総合学習などであるのかもしれませんが、リアルな大人に出会うような講義などが早く一般的になっていけばいいなあと思います。たとえば、今日のような場が、授業であってもよいと思いますし、こうした場がたくさんある大学は、多様な人材モデルを学生に示すことができるので、鈴鹿大学がそうになってほしいと思います。



(渡邊)

最後に、市野学長のほうから、パネルディスカッションの総括という形でまとめていただければと思います。

(市野)

三人の先生方にまとめていただいたことを、大学にとってどのように活かしていくか、あるいはこのプロセスをいかに社会に発信していくかが重要だと感じました。

お話しいただいた一言ひとことは、理論を超えた実践の言葉としての響きがありました。今日は学生もたくさん来ていますが、普段とは少し違う輝いた学生の姿を目にすることができ、大変うれしく思っています。

これからも、お力をお貸しいただきますよう、お願いいたします。本日は、誠にありがとうございました。



シンポジウム閉会の挨拶

高嶋重次

(学校法人享栄学園 鈴鹿大学 副学長)

みなさま、本当にありがとうございました。当初は、少し大きい会場での実施予定でした。一番重要なのは、私たちの準備作業のイノベーションだと痛感しました。これが、ビジネス・イノベーション研究センターのキックオフということで、非常に勉強になる機会でした。

本日のお話を伺っておりまして、イノベーションとは何なのかということが、よくわかりました。仲田さんからお話のあった「井の中の蛙、大海を知らず」。これだと思いました。蛙は海を知ることができません。淡水の中でしか生きていけません。海水や汽水では死んでしまいます。生物学的には、大海で生きることは無理な訳です。それを無理だとあきらめずに、蛙が海水の中であるいは汽水の中で、どのように生きるか、どのようなライフスタイル、どのようなビジネスモデルをつくるか、それをすることによって世間は注目してくれる訳です。そのことによって、自分をアピールすることができます。イノベーションというと、普通、技術革新と訳されています。これは 60 年近く前の 1958 年の経済白書で使われ、定着したようです。しかし、語源を見ますと“innovation”は、場所や方向を示す“in”、変えるとか新たにするという意味の“novate”から成り立っています。私たちは、中から、あるいは中を変えなければならないのです。それがイノベーションだと思います。

お三方から参考になるお話を伺い、刺激的でよい情報を得ることができました。私たちも、これからどんどんイノベートしてまいります。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

